助成番号：183

日本草地学会訪中団に参加して

堀　川　　洋
草地学科草地生産学研究室

1．目　　的

1985年国際草地学会議の日本開催に対して，中国の草地学研究者等のより深い理解を得て，密接な協力関係を結ぶために，日本草地学会より訪中団が送られた。その一員として参加し，両国の草地学に関する情報交換および東北，内蒙古における草原生態の視察を目的とした。

2．期　　間

1983年８月26日～９月５日

3．場　　所

中華人民共和国（中国農学会，吉林農業大学，長春市浄月人民公社，東北師範大学，内蒙古畜牧学院，内蒙古紅旗人民公社）

4．内　　容

訪中団は仁木厳雄国際草地学会議組織委員長を団長とし，全国の大学，試験場関係者16名の構成であった。

北京到着後，中国農学会国際学術交流工作委員会，中国科学院植物研究所，中国草原学会の代表者と会談した。席上，中国側から国際草地学会の日本開催に対して政府および関係部門の援助，協力を惜しまないこと，また今後ますます日中両国間の科学技術の交流を盛んにしたいとの強い意向が示された。

その後，吉林省の長春市に行き，まず東北師範大学を訪問した。当大学は日本への中国留学生の語学研修機関でもあり，本学に留学中の数人はここで日本語研修を受けた後，来日している。大学では祝教授にお会いした。1983年８月に日本で開かれた国際畜産学会に出席し，帯広にも立寄られた方であり，一行の中の数人とはすでに面識があった。その折，特別に時間を設けて東北，内蒙古における草原生態について貴重なスライドによる話を聞くことができ，後日訪問する地区の農牧業を理解する上で大変参考になった。吉林農業大学では，東北地区の農業について説明を受けた後，附属農場を見学した。この地区の気候は北海道とほぼ同じ条件であり，農場で栽培していた作物も，大豆，トウモロコシ，コウリャン，アルファルファ等なじみのものが多かった。中国の農業に関して一部報道もされているが，この機会にぜひ我々の目を通してその実態を見ておきたいという強い

希望から，地元の国際旅行社と交渉を重ね，外国人があまり入ったことのない人民公社および自由市場の見学が実現できた。長春市の郊外にある浄月人民公社は野菜生産を中心に，養豚，漢方薬用の鹿の飼育を行っていた。公社の経営は政府の方針に基づき，野菜の種類，量が決められる計画生産方式がとられていた。この公社でもそうであったが，中国では農業の機械化は行わず，人手による作業が一般的であった。最近，公社員が個人で自由に使うことができる自留地制度が導入され，そこで生産した品物を自由市場で売ることによって個人収入が増え，以前に比べて裕富になったという話であった。自由市場では多くの人々が店を広げており，食料品は品数，量とも豊富であり，買物客で混雑していた。

つぎに，長春から一度北京に戻り，汽車で14時間の内蒙古の中心地フフホトに向った。北京から西進し，標高も増すに従って，気温は低下し，車窓から見える植物相も次第に乏しくなった。いよいよ広漠たる草原に近づきつつある感を強く受けた。フフホトでは，内蒙古農牧学院を訪問し，当地区の農牧業について説明を受けた。内蒙古地区は標高1,000 m以上に位置し，年間降雨量400 mm以下，気温最高20℃，最低−30℃という厳しい条件で，栽培可能な作物はバレイショとエンバクに限られており，しかも地力の関係から隔年栽培である。畜牧は天然草原を利用し，羊が7割，その他馬，牛，ラクダの放牧を行っている。その後，市街から車で3時間の紅旗人民公社に行き，蒙古草原を目のあたりにした。その時の印象は，まさに「天は蒼々　野は茫々　風吹き草低れて，牛羊を見る」であった。草原の主要草種はハネガヤとマンシュウアサギリソウであったが，植物は家畜に食べ尽され，わずかに緑が残っている状態であった。この荒廃の原因は，乾燥による生育量の低さに加えて，過放牧によるものであり，重大な問題となっている。その対策として人工草地の造成も試験的に行われていたが，良い結果は得られないようであった。また，草原内の牧家では解放前からこの地域で生活しているお年寄から話を聞くことができた。内蒙古は自治区ということで，政府は少数民族の保護政策をとっており，昔の遊牧生活から現在の定居生活に変っているが，昔ながらの民族色を濃く残していた。液にはパオに泊り，モンゴル族の伝統的歌舞を楽しむこともできた。その折，顔の造りや歌の調子などから，日本の民族社や文化面との繋がりを見出すことができた。

今回の旅行では通訳の方々に大変ご苦労をいただき，我々の希望通り，かなり内部に入り込んで中国の農牧業の生の姿を見聞することができた。また全ての訪問先で歓迎を受け，一般の人々と接する機会が持てたことは相互の国を理解する上で大いに役立った。現在中国では国民が一丸となって国家建設に邁進中であり，非常に活気に満ちていた。将来の姿をぜひもう一度見たい思いである。